在宅学習を目的としたコミュニケーションボードの開発

Development of Communation Board for Home-Based Learning

渡辺 哲郎
Watanabe Tetsuo
関西大学大学院総合情報学研究科
Faculty of Informatics, Graduate Schol of Kansai Univ.

黒上 晴夫
Kurokami Haruo
金沢大学教育学部
Faculty of Education, Kanazawa Univ.

＜あらまし＞インターネットが家庭への本格的な普及を見せる中、不登校児へのインターネットを活用した支援も、従来より一般的な形で、より広く活用されている形で実現できれば支援を始めるまでのハードルを低くすることができる。今回はそのような一般的なインターネットアプリケーションである WWW をベースとしたコミュニケーションボードを開発し、不登校児の家庭での学習活動を支援する方法の考察を行った。

＜キーワード＞不登校　在宅学習　インターネット

1．背景

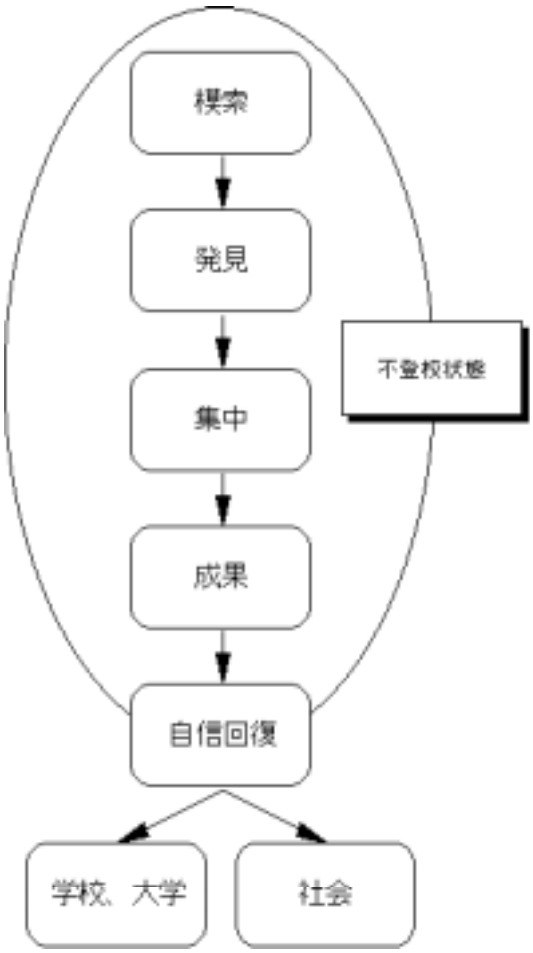
インターネットを不登校児の支援に活用するという試みはこれまでにもいくつか行われており、電子メールのやりとりや学習用のツールの開発が効果を発揮している例が報告されている。

一方で、日本のインターネット人口は２千万という数字にまで達し、家庭への普及の分水嶺と言われる１千万人を大きく越え、いよいよ一般家庭においても普及が進みつつあると言える。これは言わばテレビが街の電気屋から茶の間に入りこんできている状況に似ている。いや、昨今のメディアの細分化を考えればそれ以上の意味があると言ってもそれほど大げさではあるまい。このことはつまり、上のようなインターネットの活用が、ごく一部の限られた実験的な側面の強いものから、より一般的なものへと変わってきていること、変わることのできる状況にあることを意味している。

本研究ではこうした状況を踏まえ、不登校児のサポートを行うコミュニケーションボードの開発を試みる。

2．不登校児の支援におけるボードの位置付け

不登校という現象に対し、教育の取る態度は様々である。学校への復帰を願うもの、学校へ復



帰しなくても社会生活を営めればよしとするもの、学校への復帰ひとつとっても、その形は実に多様であり、不登校児への支援と言っても、どういう支援をし、どういう成果を目指すのかは一概には言えない。

そこでまず今回のボードは何を目指しているのかを述べることから始める。

不登校と一口に言っても原因や本人の気持ち、行動、親の理解などは千差万別であり、これを病気を治すように原因を特定し、そこへ処方を行うことは難しい。しかし、ある締度その状態の移り変わりには共通して見られるものがある。図は非常に簡単なそのプロセスの一例である。

一般に学校へ通学していた状態から登校をやめ、不登校の状態に変わるには非常に多くの苦悩を伴う。いじめのように特徴的な原因がある場合もあるが、ない場合もある。特徴的な原因がある場合はその原因を取り除くことで学校へ復帰できることもあるが、今回はそういう場合は想定していない。

一旦不登校の状態になると、出席して学校で成績を受けること以外の自己評価の材料を見つけないと自己否定の感情でいっぱいになる。そこでこの感情に負けないように自己肯定するための模索を行う。生活リズムが昼夜逆転し、漫画やゲームや小説などに没頭している時期はこの模索の時期に当たると考えられる。

ここでこの模索を邪魔せずに手助けし、その子が自分に合うものを発見できれば、それに関すること、周辺のことがらについて自発的に学習活動へとまい進していくことが期待できる。

そこである程度学習成果がはっきりとわかる形でアウトプットできれば、それがすなわち本人の自己評価の材料となり、徐々に自己を肯定することができるようになり、自信へと繋がる。自信がつけば上級学校への進学や社会への進出はそれほど難しいことではない。

以上、非常に乱暴に不登校からの回復プロセスを述べたが、このようなプロセスの支援を目指し、コミュニケーションボードを開発する。

3. ボードの設計について

今回のコミュニケーションボードの開発は、独自のソフトウェアの開発ではなく、一般的な WWW ベースの掲示板の形式を利用することにした。これは先に述べたようにインターネットがポピュラーになってきていること、その中で掲示板サービスが多くの人に利用されていること、掲示板の利用に関して先行事例が豊富であることなどがその理由である。また他の一般の Web サイトへの接続と操作方法が変わらないので特別なレクチャーなどを用意する必要がなく、コミュニケーションに集中しやすいのもメリットの一つである。

ただ、今回の開発で特に考慮すべきこととして、プライバシーの保護、掲示板の形式ではあってもより親密さを感じられるような雰囲気の演出はもちろんのこと、学習活動へのきっかけとしても学習活動そのものにも使える、つまり内容の整理などを行いやすい仕掛けを用意する必要がある。またオンライン、オフラインでの学習に利用できるリソースの情報提供、あるいは学習材そのものの提供なども重要であろう。

以上のような点に留意しなが今回の開発を行った。

4．今後の課題

今回は開発の話に終始したが、次回以降は実際の活用について報告したい。